毎日新聞 〔第3種郵便物認可〕

ブックウオッチング

街の本屋さん

サンブックス浜田山（東京都杉並区）

文芸書そろえる駅前書店

京王井の頭線浜田山駅前にある「サンブックス浜田山」。地下の改札口を出て地上に出るとわずか10秒で到着できる駅前書店だ。店舗の外にある棚は雑誌などが並び、他の書店と同じだが、中に一歩入ると文芸書、人文書の充実ぶりに目を見張らされる。

代表の安藤弘さん(60)がサンブックスを創業したのは1983年。商店街の通りを挟んで対面する鮮魚店の三男だった安藤さんだが「魚屋を継ぐのが嫌」で書店を始めた。父が三男、自らも三男だったため社名を「有限会社さんさん」とした。当時、近所に「浜田山書房」という店があったため(現在は廃業)、店名をサンブックス浜田山にした。鮮魚店は安藤さんの兄が継いでいる。鮮魚店の常連客に、2001年12月に倒産した人文・社会科学系の書籍専門取次、鈴木書店の幹部がいた。「その人の影響や助言もあり、創業当時から〝硬い本〟にも強い書店だった」と安藤さんは振り返る。

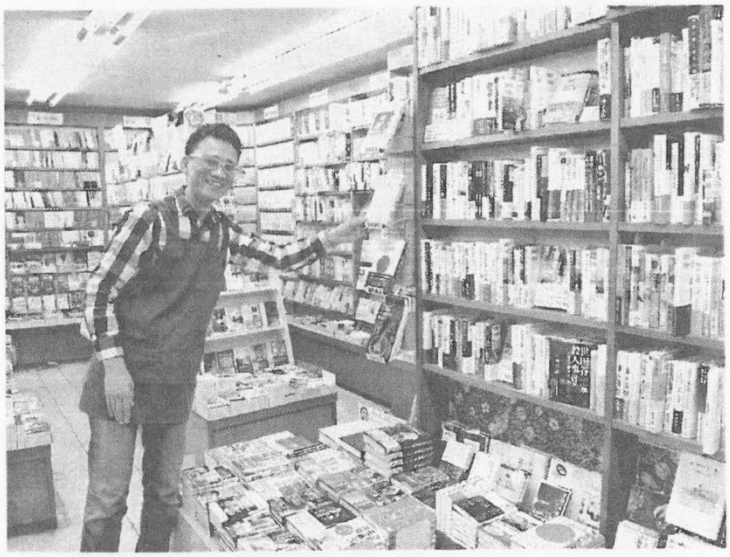
15年前に木村晃さん(43)が店長になってから、店長が選んだ文芸書を置く傾向が一層、強まった。安藤さんのおいである木村さんは「高校に入ってすぐから、この店でアルバイトをしてきた」というだけに経験は長い。週1回は神田小川町などの書店を回り、自分で選書している。「大手取次から来るのは、並べたいと思わない本ばかりだから」と苦笑いする。

レジのすぐ隣には「新刊&売りたい本」と名付けられた棚がある。「パリ同時テロ事件を考える」(白水社)、一橋文哉さん著「世田谷一家殺人事件 15年目の新事実」(角川書店)、橋爪大三郎さんほか著「クルアーンを読む」(太田出版)などが陳列されていた。

レジの前は「フェア」の場所。取材時は年末年始で、手帳や家計簿、暦を置いていた。ここでは2～3カ月交代で、企画ものをしている。企画は木村さんが考え、出版社に交渉する。これまでに「講談社文芸文庫フェア」や「ちくま学芸文庫フェア」などをやってきた。09年に開催した晶文社の「品切れ本フェア」は好評で、過去に白水社、平凡社でも開いた。2月からは工作舎のフェアが始まる。

浜田山周辺には作家や大学教授なども多く住むといい、そうした客から「こんな本をそろえたら」というアドバイスを受けることも。木村さんは「街の本屋さんに置いていない本があるのがうちの特徴」と話す。ドナルド・キーンさんのコーナーには「戦場のエロイカ・シンフォニー」(藤原書店)、「日本文学は世界のかけ橋」(たちばな出版)などの単行本をはじめ多くの文庫本が並ぶ。このことを知ったマスコミ関係者がキーンさんを連れて店頭に現れたことも一昨年にあったそうだ。

単行本を買ってカバーを頼むと、はさみとセロハンテープを使って、しっかりとしたカバーを作ってくれる。【須藤晃、写真も】



「よそには置いていない文芸書をそろえています」とお薦め本の棚を説明する店長の木村さん

棚ごとに分類し表示

サンブックス浜田山（東京都杉並区浜田山3の30の5、☎03・3329・6156）。月～土曜は午前10時～午後10時。日曜祝日は午前11時～午後9時。広さは約65平方㍍。店の壁に沿って書棚が並ぶ。棚ごとに「児童書」「エッセー」などの表示があってわかりやすい。中央には雑誌や文庫本。文庫は筆者の50音順で探しやすい。

切れ本フェア」は「用意した370冊中240冊が売れた」と、古い手帳を見ながら話す。「品切れ